十六、木造開山任山良運坐像

江戸時代

海蔵寺　大字東河内字五郎内

像高　三八・八㎝

寄木造　玉眼嵌入　彩色

禅宗では祖師、先徳の肖像を尊重し、師より教えを受けたことのしるしとした。これらの肖像を頂相と呼び、鎌倉時代以降、禅宗の興隆とともに多くの彫像や画像がつくられた。この像は袈裟をつけ、曲彔といわれる椅子の上に結跏趺坐する。そして曲彔の下に裳裾を長く垂らし、頂相の特徴的表現をみせている。曲彔の裏に墨で銘文が書かれ、造立年代やこの像をつくった仏師などが知られる。それによるとこの像は当寺の開山の肖像で、明和五年（一七六八）に岩瀬郡柱田村（現岩瀬村柱田）に住んでいた仏師「大原右京賀全」によってつくられたものであることがわかる。その他、この像の造立にあたり、金品を施入した人々の名などが記されている。

頭部を一材で彫出し、前後に二材を合わせた体軀に挿し込んでいる。お顔は写実的に表現されているが、形式的な作風は否定できない。しかし江戸時代の岩瀬地方の仏師の作であることがわかり、当地方の基準的な作例となるであろう。

木造開山任山良運坐像

十七、木造阿弥陀如来立像

江戸時代

龍沢寺　大字西河内字龍ヶ沢

像高　六一・三㎝

寄木造　玉眼嵌入　漆箔

当寺は縁起などによると、八幡太郎義家が建てたという。天喜元年（一〇五三）に建てられたというから、その歴史はかなり古い。しかしこの伝承を裏付けるような遺品はない。明治三十五年（一九〇二）に罹災し、この像は罹災後、常世北野村八幡の光明寺より移したものと伝える。

小粒の螺髪を彫出し、右手をあげ、左手を垂下して、それぞれ第一指（拇指）と第二指（人差指）を捻じ、来迎印を結んでいる。構造は頭部を前後に矧ぎ、襟の線で体軀に挿し込む。体軀は前後に二材、さらに両肩より袖先まで通して各一材を体側に矧いでいる。現在、漆箔が剝落し、右手の指先なども一部失っている。

穏やかなお顔をしているが、湯岐阿弥陀堂阿弥陀如来立像と同様、側面からみると